



Title	＜紹介＞田島智子著 『屏風歌の研究 論考篇・資料篇』
Author(s)	丹下, 暖子
Citation	語文. 2007, 89, p. 60-61
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69099
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

田島智子著『屏風歌の研究 論考篇・資料篇』

丹下 暖子

田島智子氏がこれまでの研究を結集された『屏風歌の研究』は、新稿二本を含む論考篇と、さまざまな和歌集に散在する屏風歌を集めた資料篇から成る。本書が、さまざまな角度から屏風歌を分析し、屏風歌とは何かを追究するものであることは、以下に挙げる論考篇の構成からも明らかだろう。

序章、第一章「屏風歌の社会的状況」、第二章「道長と屏風歌」、第三章「屏風歌の表現」、第四章「屏風歌の題材」、第五章「屏風歌の影響」、第六章「屏風の実態」、終章

論考篇が考察対象とするのは、九世紀末頃から十一世紀半ば頃まで。屏風歌が流行し、衰退するまでのこの期間を、屏風歌詠作を請け負った歌人の顔ぶれの交代に着目し、古今集時代、後撰集時代、拾遺集時代の三期に分け（序章）、考察を進められている。第一章では、屏風歌制作に関わる人々に注目する。まず屏風歌の注文主という観点から、古今集時代前半は主に天皇や皇族関係のために制作された屏風歌が、次第に臣下にも広まってきたことを指摘する（第二節）。拾遺集時代には藤原道長が中心となり、屏風歌制作に関与したことが知られているが、そこに至るまでの歴史的な展開を明らかにしている。また、第二節以下では道長が中心となる拾遺集時代の様相を、屏風歌に関わった公卿達に着目

して考察している。

道長については、さらに第二章で「寛仁」二年頼通大饗「屏風」を取り上げ、分析されている。関連の和歌資料や古記録の検討から、屏風歌を巧みに利用した道長の政治的意図が鮮やかに浮かび上がる。

第三章から第五章は、屏風歌の表現や題材を通史的に見ることで各時代の特色や変遷を追い、屏風歌が和歌史の中で果たした役割を探ろうとするものである。このうち第五章は書き下ろし。古今和歌六帖及び初期定数歌・歌合との関係を詳しく調査し、屏風歌がどのような形で取り入れられていったのかを考察している。

第六章第一節「屏風歌の制作法」は、本誌第四十七輯（昭和六十一年四月）に発表された同名論文に基づくものである。具体的に個々の屏風歌を検討することで、屏風歌を詠む方法には従来言われてきた言葉の題のみを与えられる場合の他、歌人達が絵を直接見て詠む場合もあったこと、またそれぞれの方法が屏風歌に与えた影響を指摘する。第二節では屏風歌そのものの考察から離れ、物語における屏風、障子の実態、意味を明らかにする。いずれも屏風歌を追いかけてこられた氏ならではの着眼点による論考である。

資料篇は、氏が多年にわたって収集、整理された屏風詩歌資料を公開されたもの。周知のとおり、屏風歌研究は、まず勅撰集や私家集、日記などに散在する資料を収集することから始めなければならぬ状況にあった。それがこの資料篇の刊行により、屏風

ごと、時代ごとの通覧が容易なものとなったのである。資料篇では、後拾遺集時代以後のものも含み、二四九点、三千首近くの屏風歌について詳細な考証を加え、成立年、題材、詞書、歌、他本、さらには関連論文まで一覧できるよう、まとめられている。充実した索引（和歌の全句索引、歌材索引など）もあり、至便なものとなっている。

今後、本書が屏風歌研究必携の書となることは言うまでもない。随所に表を用い、新知見に富んだ研究成果を分かりやすく示された論考篇、丁寧な考証に基づき整理された資料篇は、ともに屏風歌研究の裾野を広げるものでもあると思う。なお、氏には本書にまとめられた論考以外に、「拾遺集の配列と屏風歌―配列に広がる屏風絵―」（『中古文学』七十八、平成十八年十二月、中古文学会賞受賞論文）などもあることを付け加えておく。氏の更なるご活躍が期待される。

（和泉書院、二〇〇七年三月、論考篇四五三頁・資料篇七四五頁、本体価格二五、〇〇〇円）

―本学大学院博士後期課程―